日本の武道は

グローバリゼーションとショービジネスに翻弄され、その精神は失われてしまったのか

本誌編集者も精神修練を体験した(99ページ記事より)。

SPECIAL REPORT
徹底検証！

死んだのか

武道とは何か、と問われれば即答は難しい。哲学的な究極目標は別としても、その言葉の定義さえ簡単ではない。

では、古武術と武道と格闘技の違いは何か。こうなると多少は答えやすくなる。江戸時代以前、武士が敵を殺す技術、いわゆる武芸十八般として体得していたものが古武術である（もちろん、「古」武術というのは後世の呼び名であるが）。一方、明治期に嘉納治五郎が柔道を創始し、さらに日本が戦争や海外進出を経験する中で、かつての武術を精神鍛錬と国民教育の体系に位置づけて生まれたのが武道である。従って、技術の習得より、むしろ人間的成長を目標としている。そして、相手を倒す技術の部分を競うスポーツが、格闘技と呼ばれるものだ。

人を殺す技術でもなく、技の修練度を競うスポーツでもない。それが武道のアイデンティティであるとすれば、格闘技ブームは武道の隆盛とは無関係と言わなければならない。

精神修練、国民教育としての武道は今も日本に根付いているか。折しも政府は武道を学校教育の場で必修化しようと動き始めたが、その成否のカギは、日本社会と日本人の心に、武道が生きているかにかかっている。

撮影／秦洋社写

日本柔道

国際柔道連盟理事会に日本人ゼロ――世界の山下が未曾有の危機を語る

ロシア大統領 プーチンも傾倒する嘉納治五郎師範の「精力善用・自他共栄」を未来につなげ

東海大学体育学部教授
NPO法人柔道教育ソリダリティー理事
山下泰裕
YAMASHITA Yasuhiro

「柔能く剛を制し、剛能く柔を断ず」を真髄として1882（明治15）年に生まれた柔道は、創設当初から海外普及に努力し、いまや海外の選手が日本の選手を圧倒するほどの勢いだ。国際柔道連盟には199か国が加盟し、柔道の魅力はさらに広がりを見せている。スポーツとして国際的認知が高くなればなるほど、ルールや技は変化し、勝敗への執念も強いものになっていくに違いない。その一方で日本柔道の本来の良さ、精神鍛錬、相手への敬意はどのように海外に伝えられるのか。1985年に現役を引退するまで203連勝した"生きた伝説"東海大学教授・山下泰裕氏が、2003年から4年間務めた国際柔道連盟理事としての成果と今後の世界柔道を語る。

写真提供／東海大学山下泰裕研究室

ロシア大統領・プーチン氏にとって柔道は哲学であり、山下氏を大変尊敬しているといわれる（写真下はモスクワで少年に柔道指導する山下氏とプーチン氏）。

Copyright 2006 Yasuhiro Yamashita All rights reserved.

「世界の山下」だからこそできたこと

国際柔道連盟（IJF）には、現在、199もの国と地域が加盟している。柔道はインターナショナルなスポーツであり、すでに日本一国のものではない。と同時に、日本の心、武道の精神を伝えるものとして大切にし、世界に広めていかなければならないと考えている。

私は03年にIJFの教育・コーチング理事に就任し、柔道発展のためにさまざまな活動を行なってきた。会議やセミナー開催のほか、リサイクル柔道着や畳の送付、指導者の派遣、柔道の教育的価値の向上といった活動を通して、柔道の未来に向けて多少なりとも貢献できたのではないかと自負している。

とくに理事就任当初は、現場のコーチたちによる審判への抗議や態度の悪さが問題になっていたので、理解を深めてもらうことに尽力した。もともとコーチたちは柔道の教育的価値をよく知っている。だが、オリンピックなどの大会では当然勝つことが求められているため、審判にプレッシャーを与えたり猛烈にアピールすることが起きてしまう。また、一国の監督やコーチともなるとプライドも高く、なかなか人の意見に耳を貸そうとはしなかった。そこで私はブラックリストに載っているコーチたちと個別に話をし、国際大会の折には何回かミーティングも開いた。

それが私にできたのは、やはり私の選手時代の実績に対して彼らが一目置いていることと、アトランタ・シドニー両オリンピックを通した、8年間の全日本監督時代に、国際交流を積極的に行なってきた姿勢を見てくれていたからだろう。世界の監督やコーチたちと共に、柔道の持つ教育的価値に対する理解を確認できたことは、非常に有意義なことだった。

しかし、07年9月10日のIJF総会で行なわれた教育・コーチング理事の選挙で、私はビゼールIJF会長の推すアルジェ

【PROFILE】1957年熊本県生まれ。東海大学大学院体育学研究科修了。全日本選手権9連覇、ロサンゼルスオリンピック無差別級金メダルほか、タイトルを多数獲得。85年、203連勝のうちに現役を引退。東海大学柔道部監督、アトランタおよびシドニーオリンピック日本代表監督などを経て、2003～07年まで国際柔道連盟教育コーチング理事を務める。2006年、「特定非営利活動法人　柔道教育ソリダリティー」を設立、理事に就任。主な著書に「武士道とともに生きる」（奥田頴氏との共著、角川書店）「闘魂の柔道　新装版」（ベースボール・マガジン社）などがある。

リアのメリジャ氏に敗れ、再選を逃した。61対123のダブルスコアで、完全な一本負けである。

ルーマニア生まれでオーストリアの実業家であるビゼール氏は、豊富な資金力を背景にIJFで勢力を拡大してきた人だ。朴容晟（パクヨンソン）会長（当時）を不信任案で辞任に追い込み、事務総長と財務総長の選挙でも圧力と取引によって自派の候補を再選させた。また、規約を無視する形で会長任期を6年に変更し、世界選手権の毎年開催やランキング制の導入といった重要事項さえ、総会や理事会に諮（はか）ることなく、決定事項として総会後に発表した。

教育・コーチング理事の選挙でも、ビゼール氏は影響下にある国々を締めつけながら選挙活動を展開。私はあくまでも4年間の実績を判断してもらう方針で臨んだが、結果はすでに述べた通りである。

教育・コーチング理事は長年、日本の代表者が務めてきた。発展途上国への支援や柔道の教育的価値を高めることをその役割とするため、全日本柔道連盟や講道館の支援なしでは困難な仕事だからだ。

私が再選を逃したことで、IJF理事会に日本からの代表者が1人もいなくなる事態が生じた。後に上村春樹・全日本柔道連盟専務理事が議決権のない新理事に指名されたが、ビゼール会長の独裁ともいえる運営体制のもとで、今後、IJFがよりビジネス志向を強め、柔道のショー化が進んでいくことが予想される。

しかし、それでも私は非常に楽観的に考えている。起こることはすべて必要があって起こる。IJFが柔道のビジネス化を進めれば、柔道に対する情熱を持つ人たちがしだいに離脱し、内部分裂から新たな体制ができるきっかけになるだろう。もし私の見方が誤りで、現体制が柔道をよりよい方向に向けてくれるのなら、それはそれでいいことだ。

私自身は、正々堂々と選挙活動を行なったので、気分は意外なほどスッキリしている。任期の最後の1年間は政争に巻き込まれて活動が停滞してしまったが、国際活動を通して素晴らしい仲間に出会い、共に力を合わせて活動できたことを誇りに思っている。

プーチン・ロシア大統領も愛する柔道の国際性

世界の柔道と日本の柔道の〝ギャップ〟が言われるが、これまで他の国のなかに、日本に対する反発があったことは事実だろう。

日本は柔道の創始国であり、圧倒的に強い時代が長かったために、驕（おご）りのようなものがあったと思う。海外から日本に柔道を学びにくるのが当たり前だと考え、日本から外国に出かけて合宿などを行なうことは非常に少なかった。

しかし、日本人から下に見られてしまう外国の選手や指導者にすれば、面白いはずがない。

撮影／坂本孝一

2007年12月7日から始まる嘉納治五郎杯国際柔道大会を前に日本の選手を指導する山下氏（12月6日、講道館柔道場嘉納治五郎師範の写真の前で）。

そのために、例えば試合での微妙な判定のときに、いつも日本側が負けてしまうということも多々あった。

そこで私は、全日本の監督になったときに、従来の姿勢を大きく転換した。具体的には、日本代表選手が海外へ試合や合宿などで出る機会を3倍から5倍も多くした。その際には、試合や合宿でも、外国に対してできるだけの協力をした。不況とはいえ、日本は最も経済的に恵まれた国のひとつだからだ。

外国は敵ではない、畳の上では敵だけれども、お互いに学び合いながら成長していく仲間でもある。この考えを実践していくなかで、外国人の日本柔道を見る目が変わってきたのではないかと思う。

04年のアテネ五輪で、日本チームは男女各7階級で金メダル8個を含む計10個のメダルを獲得した。当然、他の国にとって面白いことではなく、「日本はメダルを獲りすぎだ」と思う人もかなりいただろう。しかし一方で、「日本は〝柔道はどうあるべきか〟を世界に示してくれた」と、日本選手の見せた素晴らしい技、素晴らしい態度に対して、非常に大きな好感を持ってくれた人も、数多く存在したのである。

シドニー五輪（2000年）では、篠原信一選手の内股すかしという高度な技を見落とし、逆に相手にポイントを与えるという誤審があったが、その後、審判の技術レベルは確実に向上し、誤審は少なくなった。ただし、野球で言えば日本と世界でストライクゾーンが違うのと同様、解釈の違いが存在するのも事実である。

しかし、199の国と地域がIJFに加盟するいま、世界の基準を日本の基準に従わせようという考え方は、傲慢でしかない。柔道はもはや世界の共有財産である。日本も意見を出しながら、世界の国々と一緒に基準をつくっていくべきだろう。

そもそも柔道の創始者である嘉納治五郎*師範は、インターナショナルな精神の持ち主であった。明治維新以降、日本が西欧化していくなかで、日本古来の大事な部分は残していかなけれ

＊かのうじごろう　1860～1938年。明治から昭和にかけての柔道家・教育家。兵庫県神戸市生まれ。1881年東京大学文学部卒業。翌82年に学習院講師となると同時に講道館を創設。今日につながる日本柔道の礎を築く。日本のオリンピック初参加に尽力し、1909年には日本初の国際オリンピック委員に選出され、11年には日本体育協会を設立して初代会長に就任。36年、第12回オリンピックの東京招致に成功（40年開催予定だったが、戦争のため中止となり「幻の東京オリンピック」となった）。38年、カイロで開かれたIOC総会に78歳の高齢で参加し、帰国の途中、氷川丸船中で、肺炎のため永眠。

ばいけないと考えていたが、決して国粋主義者ではなかった。生涯にわたって日記を英語で書いていたほど、早くから国際的な視野を持ち、常に海外に目を向けていた。

嘉納師範自らが海外に出かけていき、すべて英語で柔道のデモンストレーションを行なった。こうして柔道は世界に広がったのである。

いまでは海外でも多くの人が、柔道の素晴らしさを理解してくれている。例えばロシアのプーチン大統領の柔道好きは有名だ。別邸に仮設の柔道場をつくって嘉納師範の銅像を建て、友人とともに『柔道、わが人生』という本まで著わしているほどだ。

プーチン大統領とは10回以上会っているが、05年の来日時に一緒に食事をした際、彼は「私にとって柔道はスポーツじゃない、哲学だ。柔道を通して学んだことが、いま生きている」と言っていた。

01年の夏にイタリアのジェノバでサミットが行なわれたときには、議長国イタリアのベルルスコーニ首相（当時）が、この『柔道、わが人生』を各国首脳に進呈した。嘉納師範の説く「精力善用・自他共栄」の思想こそが、世界の首脳に求められているという趣旨だ。世界中に通用する柔道の精神が、ここにも見て取れるのではないだろうか。

愛国心が強いからこそ世界平和を願う

柔道で最も大切なのは、相手に対する敬意尊敬を示すことである。相手がいるから自分を磨き高めることができるということが柔道の基本哲学だからだ。

ところが外国人選手には、最初は「礼」の意味がわからない。

例えばイスラムの国ではアッラーの神以外には頭を下げないし、欧米では日本式のお辞儀はお詫びを意味する。「なぜ悪いこともしていないのに最初に頭を下げ、勝っても負けても謝るのか」と怪訝に思う人も多い。しかし柔道をやっていくうちに、「礼」が相手に対する日本式の敬意尊敬の示し方なのだとわかってくる。

用語も「始め」「それまで」「一本」「引き分け」「待て」「指導」など、すべて日本語だから、何を言っているのかわからない。しかしそれを入り口にして、日本語や日本文化に興味・関心を持ってくれるケースが非常に多いのだ。

以前、米国の巨大テレビ局NBCのピーター・ダイヤモンド上席副社長（五輪担当）とニューヨークで話をしたことがある。彼は米国で柔道の人気を高めるには「選手やコーチ、審判がもっと感情をストレートに出すほうがいい」「用語を英語にしたほうがいい」と言ったが、まさにそこが譲れない部分、変えてはならない部分だと思う。

柔道着も帯を締めた着物である。柔道着を着て裸足で畳の上に立つ、日本式の正座をして日本式の礼をするということは、それだけで立派な日本文化の体験になるのだ。

逆に心配なのは、日本人自身が日本の大切な精神、魂を喪失してしまっているのではないかということだ。

『ラストサムライ』が公開されたとき、海外の柔道家たちはこぞってこの映画を絶賛した。私はイギリスのエジンバラでこの映画を観たが、一緒に観たイギリスの柔道家は涙を流しながら、「この映画は素晴らしい。日本人がどういう人たちであるかを世界に知ってもらう最高のプロパガンダだ」と言った。それを聞いて私は半分嬉しく、半分悲しくもあった。彼らが見ている日本の姿を、我々はもうなくしてしまっているのではないか、と思ったからだ。

その意味で、中央教育審議会が、中学校の体育で武道を必修化する方針を打ち出していることは、日本の武道界にとって、非常に歓迎するところである。ただし、必修化はそれだけ大きな責任を背負うことを心しなくてはならない。

本来、武道には、型というものを通しながら日本の心を伝えていく役割がある。押し付けではなく、体験を通して子供たちに日本の伝統や心を理解させ、育んでいく。それこそが他にはない武道教育が担うべき役割である。

そうした認識が、どこまで現場で指導する体育教師、武道の教師にあるかが問われることになるだろう。

私は人の2倍、愛国心の強い人間であり、だからこそ人の4倍、世界平和を願っている。そして柔道の持つ和の心、相手に対する敬意尊敬こそが、世界の平和につながるものと確信している。

幸いなことに、多くの方々のご協力によって06年4月にNPO法人柔道教育ソリダリティーを設立し、活動を展開している。IJFの理事は退いたが、今後も柔道の国際的普及と発展、文化交流に、より一層努力していく所存だ。

柔道を通じて学んだことを、人生に生かしてこそ「道」だからである。

撮影／坂本孝一

日本語を解さない外国人も柔道用語はすべて日本語だ（講道館で練習するブラジル人選手）。

次号の『SAPIO』（2月13日号）は躍進特大号で1月23日（第4水曜）に発売します。（一部地域では、発売日が異なる場合があります）